
ひまわり

ruma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひまわり

【コード】

N8568J

【作者名】

ruma

【あらすじ】

おひさまを愛したひまわりの話。

小さな小さな種が、ぐん、ぐん、と地面を押し上げて、やっと芽を出しました。

「おはよう！はじめまして！」

隣に生えている木に、空を行く鳥に、ひまわりの芽はあいさつをします。

「はじめまして」

木が、優しく葉を揺らしました。

「ようこそ地上へ」

鳥たちが悦びの歌を歌います。

ひまわりの芽は嬉しくなって、その目に映るものみんなにあいさつをしていきました。

*

「おはよう！あなたは誰？」

答えがありません。

ひまわりの芽は、声が小さかったのだと、もっともっと大きな声で言いました。

「おはよう！！ねえ、あなたは誰！？」

鳥がくうくうと笑いました。

「あのヒトは返事をしないよ」

「なぜ？」

「あれはおひさま。とてもとても高いところにいて、この地上のすべての物を照らしているんだよ。あんまり遠いから、地上に生きる物の声は届かないのさ」

ひまわりの芽は、なんだか哀しくなりました。でも、諦めません。

「わたし、おひさまとお話したいな。背をうんと伸ばしたら、おひさまの高さに届くかしら」

鳥はそれを聞いてまたくうくうと笑いました。

*

ひまわりの芽は、ふたばになりました。

「おひさま、わたしこんなに大きくなったよ。わたしの声が聞こえる？」

おひさまは答えません。

ひまわりのふたばは、たくさんの葉をつけながらぐんぐん伸びまし

た。

「おひさま、わたしこんなに大きくなりました。わたしの声が聞こえますか？」

おひさまは答えません。

そして、おひさまの光をたくさんたくさん浴びたひまわりは大きな花を咲かせました。

「おひさま、わたしの声が聞こえますか？わたしの花が見えますか？」

おひさまは答えません。

それでもひまわりは、おひさまが昇ってくると同時に目を覚まし、おひさまが西の山の向こうに沈むまでずっとずっとおひさまを見つめ続けるのでした。

*

ある日、キラキラ光るたてがみを持ったライオンが、ひまわりのもとを訪れました。

ひまわりはとても驚きました。

「あなたは誰？あなたのたてがみはまるでおひさまみたいね」

「私はライオン。君はひまわりだね。君の花もまるでおひさまのようだよ」

ひまわりはびっくりして、そしてとても嬉しくなりました。

「それはきつと、わたしがずっとずっとおひさまを見つめていたからだわ」

*

それからライオンは、毎日ひまわりのもとを訪れました。

ひまわりは、おひさまを見つめたまま、ライオンと色々なお話をします。

芽を出した時のこと、木のこと、鳥のこと、おひさまにたくさんあいさつをしてきたこと、おひさまに見つけてもらうために一所懸命背を伸ばしたこと……。

ライオンはこくりこくりとうなずきながら、ひまわりの話を聞きました。

「ねえ、ライオンさん。あなたはおひさまが好き？」

「ああ、おひさまのおかげで私たちは生きていける」

それを聞いて、ひまわりは葉をぐんと広げて喜びました。

ライオンはさらに言いました。

「でも、おひさまよりもずっと好きなものがあるよ」

ひまわりはびっくりして、思わずおひさまに向けていた花をライオンの方に向けました。

「おひさまよりも好きなもの？それは何？」

がふがふとライオンが笑いました。

「秘密ね」

*

ライオンは毎日ひまわりのもとを訪れます。

でもひまわりはずっとおひさまを見つけていました。

雨の日も、曇りの日も、ひまわりにはおひさまの居場所がちゃんと分かりました。

ライオンにはそれが不思議で、ある雨の日、ひまわりに尋ねました。

「どうしてそこにおひさまがいると分かるんだい？空がこんなに暗いのよ」

「どうしてかしら？自分でも分からないの。でもおひさまはあそこにいるわ」

そしてひまわりは、大きな大きな声で、おひさまに話しかけます。

「おひさま、今日もライオンさんが来てくれたのよ。ライオンさん
のたてがみはきらきら光るからきっとおひさまにも見えると思うわ」

「ダメだよ。あんなに厚い雲が邪魔をしている。それに私のたてがみも、今日は濡れてしまっけらきら光らないよ」

「そんなことないわ。雨粒がたてがみについて、きらきらしてる。いつもよりずっとおひさまみたいだわ」

ひまわりは花を揺らして微笑みました。

ライオンは、ひまわりが眩しくてうつむいてしまいました。

*

「ねえライオンさん」

おひさまが地上を照らす時間が少しずつ短くなってきたある日、ひまわりが言いました。

「わたしね、もうすぐ枯れちゃうの」

「ああ」

ライオンは、分かっていたというように、返事をしました。

「ライオンさんはいいわね。その四つの足で、西の山を越えておひさまをずっと追いかけていけるものね。わたしもおひさまをどこまでも追いかけていきたい」

「……」

ライオンは答えません。

「ねえライオンさん、お願いがあるの」

「なんだい？」

「わたしが枯れてしまっても、おひさまの光をたくさんたくさん浴びてうまれた、わたしの種たちがまた芽を出すわ」

ひまわりは嬉しそうに言います。

「わたしの種たちは、きつとおひさまが大好きなひまわりになるわ。だからね。わたしが枯れてしまったら、種を運んで欲しいの。あの西の山の向こうに。……いいかしら」

「もちろんだとも」

*

次の日、ライオンがひまわりの所へ行くと、ひまわりはうなだれていました。

「ひまわり」

ひまわりはもう、おひさまを見つめません。

ひまわりはもう、ライオンに語りかけません。

ひまわりは、枯れてしまったのです。

「ひまわり。私はおひさまよりもずっとずっと君のことが好きだったよ」

ライオンはひまわりの、種のぎっしり詰まったその花をくわえて、西へと駆け出しました。

去年、ひまわりの母親に頼まれて東の山の向こうからやってきた時のように。

西の山の向こうは海岸。

海岸には来年、ライオンの愛したひまわりの子どもたちが花を咲かせることでしょう。

そのひまわりは、おひさまよりもライオンのことを愛してくれるのでしょうか。

ライオンはまっすぐまっすぐ西へと駆けていきました。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568j/>

ひまわり

2011年10月6日18時14分発行